



あるじでえ

No. 2

世田谷区教育委員会 民家園係
 〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14
 ◎ 次大夫堀公園民家園
 ☎ 03(3417)8492
 ◎ 岡本公園民家園
 ☎ 03(3709)6959

平成元年7月1日 発行

平成8年5月 増刷
 平成29年3月 増刷

たな 七夕

7月7日は七夕です。この日には里芋の葉にたまっている露で墨をすり、短冊に願い事を書いて竹に結び付け、その竹を庭先に立てます。

〈七夕のいわれ〉

7月7日に、中国で乞巧奠という行事がおこなわれていました。乞巧とは裁縫の上達を願う意味で、星に願い事をたくすお祭りをしていたのです。中国では古くから牽牛星（彦星＝鵲座のアルタイル星）を農作業の時期を知る基準とされ、天の川を隔てた織女星（織り姫＝琴座のベガ星）は養蚕や糸・針の仕事の星と考えられていました。そして7月7日に、離ればなれになっている2つの星が逢えるというロマンティックな伝説もありました。

日本でも平安時代に貴族の間で、7月7日に乞巧奠がおこなわれていた記録が残っています。しかし我が国では乞巧奠が伝わる前から棚機女の信仰があったとされています。棚機とは機織り機のこと、棚機女は水辺で機を織りながら神を迎える女性のことでした。「タナバタ」という名称は棚機女から生じたとされ、七夕はこの民間信仰に中国の乞巧奠や星祭りの習俗が結び付いたものと考えられているのです。そして竹に「願い」を書いた短冊を飾る行事が一般に広まったのは、おそらく近世以降の寺

子屋や学校の影響があつてからと考えられています。

〈盆とのかかわり〉

7月7日には盆行事と関連する習俗も広くみられます。世田谷区内でも、7月7日は墓掃除をする日だという報告があります。一方子どもたちや牛・馬に水浴びさせたり井戸さらいをしたという地方もあります。これらは盆行事の前段階としてのみそぎ（水によって浄めはらうこと）を示すものと思われます。七夕には2つの星が会うため晴れたほうがよいという話とは逆に、七夕雨といって短冊が流れるほど雨が降るとよいという言い伝えがある土地もあります。このことなどは、いかに盆の前のみそぎが大切であったかを意味するものでありましょう。さらに世田谷区内の粕谷や下祖師谷ではチガヤ（野原や道端に生えるイネ科の植物）で「タナバタサマノウマ」という馬の形を作り屋根に上げたという報告もあります。宮城県などでは七夕の馬や牛に乗って御先祖様が来られるという話があります。このような伝承から、7月7日は盆行事と関連があることが伺えるのです。

七夕というと、私達はまず星祭りを思い浮かべますが、星祭り以外にも様々な行事があります。そのようなことを調べてみるのもおもしろいでしょう。

区文化財資料調査員 尾上 一 明

※ 「あるじでえ」とは、①次大夫堀（民家園）にて②ある時代という意味で付けました。

盆

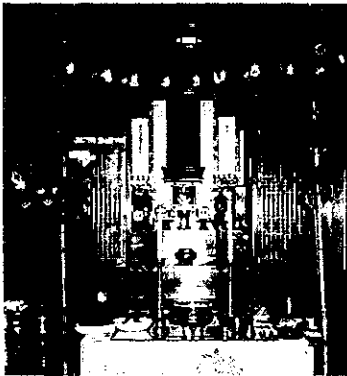
棚

お盆は先祖の霊を我家へ迎えて、子や孫がしばらくの間一緒に過ごす期間と考えられています。この時先祖の霊を迎えて供物を捧げる祭壇が盆棚です。魂棚・精霊棚・先祖棚とも呼ばれています。先祖の霊のことはオボンサマ・オショロサマなどと言います。

現在、お盆は旧暦7月の他、新暦7月や月遅れの8月で行なわれています。お盆の期間は13日から16日までとするのが一般的ですが、7月1日を釜蓋朔と言ったり、8月1日を八朔盆と言う所もあります。また、19日か20日を送り盆とか終わり盆と呼んだり、30日の晦日盆で盆が終わるとする所もあるようです。このように、お盆は今日よりも長い期間にわたって行なわれていたと考えられます。

世田谷では、お盆を旧暦7月で行なう所(池尻)、新暦7月で行なう所(喜多見・下北沢・奥沢)、月遅れの8月で行なう所(大蔵・烏山)があります。ここでは喜多見の盆行事を紹介してみましよう。

喜多見では7月13日以前に、家の竹藪からその年に出た新竹を4本取ってきます。また、多摩川や野川の岸辺にいてマコモ(あるいはチガヤ)を取ってきて、2~3



鈴木房文家(宇奈根)の盆棚

撮影 米畑勝行(1988年8月11日)

日かけてよく乾かし、藪こぎに編み上げます。

13日のお昼になると仏壇の前に台を置きます。この台の四隅に竹を1本ずつ立て、それぞれの竹の上部に左廻いのチガヤの縄を張り廻らします。そしてこの縄には稲・陸稲・麦・柿・ホウズキ・インゲンなど、家々で穫れた作物を吊るします。台の上にはマコモの藪こぎを敷き、仏壇の中から位牌をすべて取り出して安置し、女郎花・撫でしこ・南瓜・胡瓜・西瓜等を供えます。また、台の手前の方には胡瓜と茄で作った牛馬を置き、この横には里芋の葉と刻んだ茄を入れた鉢に水を注いで、ミソハギを添えます。このようにして盆棚が作られます。また、盆棚の後ろに十三仏の掛軸を掛ける家もあるようです。

13日の夕方には各家々の門口に家族中の者が出て、作り物の牛馬を置きます。その側らで麦幹を燃やして、「遠い所を大変でした。」と言って先祖の霊を迎えるのです。この時燃やされる火を迎え火と言います。それから、作り物の牛馬を盆棚に移して、家族全員で拝みます。

盆棚に迎えられた先祖の霊に対しては毎日家毎に違った御馳走を供えます。13日には小豆ご飯・ぼたもち・野菜の煮物、14日はうどん、そして15日が饅頭・そば・団子などです。

このようにしてしばらくの間、子や孫たちと楽しく過ごした御先祖様は、15日の夜から16日の朝にかけて送られます。盆棚に供えておいた作り物の牛と馬の背中に、半紙に包んだお茶と米を結び付けます。そして盆棚に灯してあるローソクを戸主が持ち、家族の者たち全員が門口まで出て、「道の間違わずにお帰り下さい。」と言いながら、戸主がローソクの火で麦幹に火を付けて送り火を燃やすのです。

区文化財資料調査員 高見寛孝